

8月研修

「実践を持ち寄って、評価について考えてみませんか」～プロフィシエンシー重視の教育現場では～

担当講師： 黒崎亜美（ラボ日本語教育研修所）

1. プロフィシエンシーとは

研修会でのプロフィシエンシーの定義づけを行う

(1) 現状 例) OPI での扱われ方

(2) コミュニケーション能力とプロフィシエンシーの違い (以下、配付資料より抜粋)

コミュニケーション能力	● 「文法能力」「社会言語的能力」「談話能力」「方略能力」(Canale & Swain 1983) ● 能力の「レベル付け」には関与せず、教育的意図も持たない
プロフィシエンシー	● 語学教育に必要な測定という観点に立った概念 ● 何らかの言語活動が機能的に果たせる、いわゆる総合的に「できる」能力 ● 「現実生活において、 <u>どのような活動</u> (タスク、機能、内容) が <u>どのような場面</u> で、 <u>どのような正確さ</u> (文法) を持ち、 <u>どのような言語形体</u> (テキスト・タイプ) として表出するか ⇒ 「どのような」: 難易度・レベル分け

(3) プロフィシエンシーを重視した教育実践

【条件】 ・タスク先行型

・実際の場面・話題

・教師自身が実際の言語活動を注意深く観察 → 評価につながる?

・「正確さ重視」からの解放 → 使うことで正確さを習得

- | |
|---------------------------------------------------------------------------------|
| ① 正確さを優先課題とせず、コミュニケーション重視とする
② 正確さ・流暢さと同様に適切さにも注目する
③ スパイラルに教育実践を組むことを考える |
|---------------------------------------------------------------------------------|

(4) 評価のあり方

・点数化するためだけのものではない

・「評価」とは、「成績をつける」と同義ではない (評価の中には、FBなども含まれる)

・フィードバックが重要

そのためには、①「何ができる／できない」を明確に提示、②タスク達成の評価項目の細分化

(5) 教師のあり方

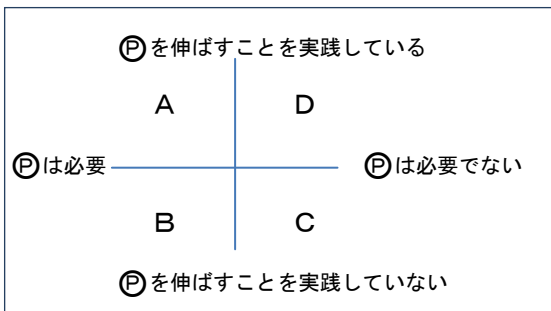
日本語教師のための 10 カ条の紹介 (→グループ活動に入るための W-UP)

2. グループ活動 1 (3グループ)

自己紹介を兼ねて、現在の自分の立場をグループ内で開示する

図 1 を使用し、自分はどのエリアに属するか。どのように考えているか。

図 1



3. ラボ日本語教育研修所での現状 (初級)

(1) 初級オリジナル教材について

プロフィシェンシーをどのようにとらえたか、どのようなカリキュラムを考えたか、その結果
学習者のどのような能力が伸びることを望んだか

- ① 作成の経緯
- ② 教材の形式
- ③ 学習項目と導入文型の紹介 cf. 第二課「レストランで」

(2) 問題点

- ① 会話が導入にいかされていない
- ② 目的が明示されていない
- ③ タスクの活動が課の目標と一致しない
- ④ タスク活動の評価が明確でない

例) 学習者の観察が不十分、教師の主観で評価、何がどの程度できたのかが不明確、

FBが不十分

(3) 今後の改善 * (2) ①~④を再考

4 グループ活動2 ～教室活動を考える～

(1) 各グループで、以下の課題について考え、教案（A4）にする。（40分）

課題	授業時間	: 90分×2 (45分×4)
	学習者レベル	: 初中級。初級クラス終了直後。学習時間 400時間程度
	活動内容	: 会話授業「許可を求める」

(2) 発表および意見交換を行う

5 グループ活動3 ～プロフィシエンシーを伸ばす活動に必要な条件を考える～

(1) 活動案を話し合う過程で、どのような活動がいいという意見があったか。それらをまとめて、プロフィシエンシーを伸ばす活動に必要な項目を考える。（40分）

例) 自然なインターアクション (教師⇄学習者、学習者⇄学習者) が発生する

(2) 発表および意見交換を行う

6 まとめ

① 活動に必要な条件から、教師がどういう授業にしたいのかがわかる。

② 「プロフィシエンシーを伸ばす」というのは、学習者の可能性を見つけること。

③ 評価は、「授業内容」「自分の教案」が客観的に分析できること。

⇒ 評価の中には2つあって、一つは教師自身の授業評価。目的にあった場面提示、課題提示などができているか、学習者の発話のチャンスが十分にあるか、話す内容について内省できるかどうかなどをチェックする。

⇒ それと学習者への評価。これは④につながる。学習者が現在「何ができているか」「何ができないか／足りないか」などを、学習者に伝えること。

④ ③をすれば、同時に学習者に「何ができた／できなかった」が伝えられる。